

日刊
スポチク

9月吉日
130円

飛び入り学長もエール

築理会総会・懇親会開催

新たな希望が!?

築理会森本会長
終始渋い顔で挨拶

会員の方々から温かい支援も



会費納入率の低さ致命的



平成16年度築理会総会速報!

前号で苦境が報じられた築理会に希望の兆しが見えてきた。

去る5月22日に行われた平成16年度・築理会総会は尻上がりの盛り上がりを見せ、総会後の懇親会では、運営を立て直す起死回生の仰天プランまで浮上した。

総会は森本仁会長による開会宣言に続き、例年通り「昨年度の決算」「本年度予算」「役員改選」と進んだ。この間、低迷する会費納入率問題に頭を悩ます会長は写真の通り、渋く、厳しい表情。10%という会費納入率の低さが築理会の運営に及ぼす影響は致命的で、会費収入が少ないのだから「ない袖は振れない」。年間予算を考えれば考えるほど険しい表情になるのも無理はない。

表情が緩んだのは、前号の会報を見た会員から「広告掲載を希望する」という温かい励ましをもら

ったあたりから。「今年から会費を納め総会にも参加しました」というサポートの声も受け、総会後の懇親会ではムードが一転した。起死回生の仰天プランも浮上?

集まった会員の挨拶は楽しく、爆笑を呼ぶ場面も続出。井口先生、平野先生、直井先生、山名先生に加え、なんと岡村学長の飛び入り参加のスピーチまで飛び出し、会場のボルテージは急上昇。そして数学科出身の美人歌手・祥子さんから歌のプレゼントが始まると会場はディナーショー状態に。

「これなら倍、いや3倍の会費を払ってもお釣りがくる」とツーショット写真にご満悦の森本会長。いっそ総会を「ディナーショー化」して会員をかき集め、一気に会費を取り立ててしまおうとの仰天プランが出てきたかどうかは定かではないが、皆が満足気な表情を浮かべていたのは事実。いやいや、来年の総会が今から楽しみだ。



総会・懇親会の模様は築理会ホームページにも写真が掲載されておりますのでそちらもご覧下さい。

特集 SPECIAL FEATURE

「OBだより」

今回はゼネコン・デベロッパー・デザイン・教育と異なる分野で活躍中のOBの方々から、近況報告や現在思っていること等を自由に書いていただきました。

「築理会」をもっと愛し、活用しよう

増村 清人(部16期)

(株)竹中工務店東京本店建築技術部長

今年の春、築理会の16年度懇親会に参加しました。卒業以来ずっと不義理をしていた私が意を決して参加したのは、築理会の2004年春号の会報、それには「築理会、経営破たんか？」とあり、読むにつれ、築理会の悲惨な？状況を知ったからです。というより、実際はやはりそうなのかという感じではありましたが、しかし、築理会への関心の低さを数字で見るとやはり、忸怩たるものがありました。



理科大建築学科の卒業生は神楽坂(築理会)で5,000人、野田(野田建築会)で5,000人の約1万人います。しかし、築理会で会費を払い関心を少なからず持っているのは10%にあたる、わずか500人程度との事です。野田建築会はもっと酷いそうです。この数字はさびしいものです。また、懇親会は30~40人程度で、ベテランの先輩方の姿ばかりが目立ちました。もっと、現役の中堅・若手の参加がこの会の活性化のためには必要です。

慶応の産業界での結束の強さ、早稲田の建築の強い連帯感、東大の独特の仲間意識、日大の幅広いネットワークなど、他の大学と較べるべくもありません。一人一人の力だけではなくこれらのつながりを含めた総合力が大学の評価なのです。社会に出て20数年経験すると、そのことが良く分かります。

何故、理科大の卒業生、築理会はこのようにまとまりがないのだろうか？何故「私の大学(母校)意識」が低いのだろうか？それは、入学時に第1志望でなく入った人が多いことが影響しているのではないのでしょうか？しかし、そんなことをいつまでも引きずってはいけません。皆、好むと好まざるに関わらず理科大の同窓、建築学科の卒業生なのです。40年の歴史と社会のそれぞれの分野で活躍して重要な役割を担っている同窓の力に誇りをもって、もっと活用すべきなのです。

理科大は同窓の力を最も活用していない大学ではないでしょうか？一人一人は優秀で社会・会社でそこそこのポジションを占めてはいるが、そこからの広がりが無い。これが理科大のOBの典型的な状況ではないでしょうか。築理会は、本来はそんな個人レベルのネットワークを広げることの出来る身近な存在です。そのためには、我々の世代がもっと参画し、ここに来るとビジネスにも、知的欲求にも、趣味にも「いいことがある」存在にしなければなりません。活用しないことは、自らが持っているポテンシャルを高めないことと同じです。

たった一度出席しただけで生意気なことを書きましたが、日頃感じていたことが、今回出席してよく分かりました。同期の仲間を誘って、築理会の輪を広げましょう。それがひいては自分の力を高めることにつながります。築理会をうまく活用できれば自分の世界が広がります。

来年の懇親会は、もっと先生方の出席をいただき、少なくとも100人以上の出席の中で、色々な分野の方とより有意義な時間を共有したいものです。

「表参道の思い出」

安田 達雄(部15期)

森ビル株式会社 広報室 参事

社会人になって20数年が経過し、母校ともすっかり縁遠くなってしまいました。そんな折、同期の広谷編集長から久しぶりに声をかけられ、原稿を寄せることとなりました。

東京生まれ、東京育ちの私は、学生時代から都市に対する興味が尽きませんでした。特に楨文彦氏設計の「代官山ヒルサイドテラス(未だ1期・2期計画の段階であったと思います)」は、その小さくも豊かな空間構成にすっかり魅了されました。やがて、東京のど真ん中で環境とプライバシーを守りながら暮らす「都市の集合住宅」というテーマは、私の最大の関心事となってい



きました。

そして大学4年生になった私が卒業設計で選んだテーマ、それは『同潤会青山アパート再開発計画』。卒業後もしばらく9号館の廊下にポロ模型が展示されていたので、ご覧になった方もおられるはずですよ。

それから20数年の年月を経て、現在森ビルが中心となって建設を進めているこの『旧同潤会青山アパート』、正式には『神宮前4丁目地区第1種市街地再開発事業(地上6階地下6階)』に、私は広報担当者として関わっています。不思議な巡り合わせと言うべきでしょう。

先日、現実の設計者安藤忠雄先生にお会いする機会があり、私の卒業設計の話をしたところ、「それはおもしろいな、一遍見せてみ……。 」とのお言葉を賜りました。

卒業設計当時、ケヤキ並木と建物の高さの関係について悩んだ記憶はありますが、残念ながら地下30mの空間構成まで考えが及んでいません、トホホ。2005年度完成を目指している本物の計画の方は、仮囲いの緑化から始まり、商業空間を内部に向けて開放するスパイラルスロープや建物本体の本格的な屋上緑化など、さすが安藤建築！表参道の新しいランドマークとしての期待に充分応えられると確信しております。

そんなことなので、安藤先生に図面をお持ちする勇気がさっぱり湧いてこない今日この頃です。

ある猛烈に忙しい数日

元永 二朗(部15期)

「ちょっと来週、上海に行かない？」

と友人が言う。コンペの話を持ってきたのだ。上海のある伝統的な地区にこれからの上海を象徴するような建築を、という、なんとも景気が良いというか、そんな実施コンペである。

現地の建築家がこのコンペに建築とメディアを融合させたものを提案しようとしていて、そのチームに友人のメディアアーティストと私の二人の日本人がなぜか急遽参加することになってしまった。中間プレゼンが来週あるという。その数日前に上海入りし、スタッフたちとミーティングをしアイデアを出し、案をまとめてプレゼンに同席する。詳細はすべて未定もしくは不明。「は？」と思わず聞き返したくなるスケジュールである。しかし考える時間は与えられていない。

バタバタと飛行機のチケットを押さえ、結局私は友人に一日遅れて一人で現地入りすることになった。渡航当日、理科大で設計製図の打ち合わせをすませ、そ

の足で成田に向かい離陸。上海に着き、到着口から出たのは深夜、日付が変わってからだった。迎えに来たドライバーが運転する黒塗りのアウディに一人乗せられ、相変わらず何もわからないまともかくも上海市内に向かった。無人とおぼしき膨大な数の高層マンション群が車窓をビュンビュン飛び去るように流れ、極度のあわただささから来る非現実感にぼんやりしながらその風景を眺めているうちに市内の事務所に着いた。この時間にホテルではなく。そして荷を解く暇もなくいきなりプレゼンに向けた作業に突入。翌朝ホテルで短い睡眠を取り、事務所に戻り、また翌朝まで缶詰め。早朝4時に出力業者へ渡したプレゼンのデータが、朝8時過ぎには立派な書籍に製本までされて並んでいる。そして上海市当局関係者などと同席したプレゼンも無事終了。こちらはもうヘトヘトだが、スタッフたちはいたって元気である。

いまの上海にみなぎるエネルギーとスピードは、バブルのようにも見えるが、しかしかつての東京のそれを遙かに上回っている。数年前に行った際、すでに街全体を作るかのごとき猛烈な建設ラッシュだったが、今もそのペースは変わらないどころか、さらに加速しているように感じるほどだ。十億人国家が意志を持って行う壮大な社会実験の一部なのだ。吸い寄せられるように世界中から人間が集まってきている。私のようなものまで巻き込まれるくらい、急速に裾野も広がっている。

そしてあっという間に日本に戻ってきた。

あの数日間は一切何だったのだろうか。幻だったのではないだろうか、景気もパツとせずスローな日本の日々を送りながら、ぼんやりしてしまう昨今の私である。



スイスの卒業証書

菊地 宏(部31期)
山名研究室 助手

今年の3月をもってスイスバーゼルにあるHerzog & de Meuron事務所を退社した。4年半勤めた。

2000年の元旦から勤めだし、表参道のプラダを3年半担当した後、北京オリンピックスタジアムの構造意匠などを担当した。長かったという感じはしないが、何かとてつもなくいろいろなことを経験したような気がする。今回は、プラダが終わってからの話をしたい。

これだけ大きなプロジェクトが終わると、がらっと身の回りに変化があった。まず、終わると同時にプロジェクトに携わっていた人々が次々と事務所を去った。それもそのはず。事務所はすでに新しい人でごった返し、我々を知る人はごく一部しかいない。平均3.5年でやめていってしまう事務所だけに、我々は完全に浦島太郎状態だった。最後まで現場でいっしょにやっていたスイス人も片付けが終わると独立していった。もう一人スイス人がいたが、その人は、南米へ飛んだ。

一気にいろいろなものがなくなりちょっとした空虚感が漂った。同時に小さなことに目を向ける時間ができた。ぼくはスイスに家がなかったので、紹介で女性アーティストの家の一部を借りて暮らした。中庭に面した5階で、素敵なおうちだった。特にキッチンの赤いリノリウムの床が、外の緑と呼応し美しかった。キッチン越しのベランダも静かで素敵だった。そこで、ブルーベリーなどを口へ運び本を読んだ。庭先にくちばしが黄色く体が黒い黒歌鳥がやってきた。毎日5時間ほど決まって同じ煙突の先で、綺麗な歌声を披露してくれた。ぼくは、それに恋をしてしまった。

この年、ヨーロッパは猛暑だった。暑かった。そこで少し北の方へ旅することにした。飛行機でベルリンに飛び、そこから北上し、デンマークへ行った。涼しかった。コペンハーゲンにあるレンガ積みの



アレッチ氷河にて

Grundtvig教会が印象的だった。高度の低い光に照らされる街中のサーモン色の漆喰も綺麗だった。

その後もスイスの山を中心にたくさん旅行をした。Brienzer Rothorn、Oeschinen湖、Aletsch氷河、などなど、毎週末ハイキングを楽しんだ。どこに行くか決めるわけでもなく、ただ、朝バーゼル駅に出向き、次出発する電車でどこにいけるか考えるのである。こーいうその日暮らした旅行をたくさんして、予期せぬ感動と出会うのであった。涼しい山頂の山小屋で、熱いRoesti(ハッシュドポテト)とSuessmost(リンゴジュース)をいただくのがスイス流の過ごし方だった。

そんな状況で恐ろしく美しい自然を前にいろいろ考えさせられた。そしてある時からなんとなくこう考えるようになった。「人間は無力だ。」そこには思い知らされるほど力強い自然があったし、自然が見えないものによってデザインされていることもわかった。自分の作るもの、成すことの小ささ、デザイナーとしての責務を感じた。「自然から落ちてくるものをどれだけやわらかく着地させられるか」ということがデザインをする人間の役目なんだということが、なんとなくわかった。そして楽になった。出発点に戻ってもよい気持ちになった。

そんなこともあって世界をぐるっと遠回りした海外生活も自然と幕を閉じた。荷物は決して多くなかったが、かなり大事な物をしょっての帰国となった。去るのは寂しいが、二つのことは同時にできない。それをみんな理解してくれたし、応援してくれた。それがすごく心強かった。「いつでも戻ってきてくれ。」というやさしい言葉を所長から頂いた。涙が溢れた。



H&deM卒業証明書

活躍するOB

各方面で活躍する卒業生。その活躍する場も、建築界だけでなく多方面に広がっています。今回は、画家として活躍する中西繁さん（部4期）の展覧会にお邪魔しました。

設計者から画家に転身

今年6月、横浜赤レンガ倉庫1号館で中西さんの展覧会が開かれた。2Fの全フロアを使ってパリやプラハなどの街並みを描いた41作品が展示された。画家と聞いて少し緊張してのOB訪問だったが、実際お会いしてみると中西さんは非常にきさくな方だった。油絵の風景画の描き方などについて分かりやすく話してくれた。

中西さんの絵は横長のキャンバスが特徴だ。「素晴らしい景観に出会ったときの感動は、ワイド画面のほうが伝えやすい」と考えた結果だという。横長に描かれた街の風景は、いくつもの焦点を持ち、巻物風の独特な風景をつくりだしている。描画スタイルも一風変わっている。「油絵は古くから現場主義。現地で直接、絵の具を乗せるのが常識ですが、それでは大きな絵は描けません」。雄大な風景が目の前に広がるような絵を描くため、中西さんは現場で多くのデッサンを描き、合成して一つの絵をつくりあげるといった方法を選んだ。

中西さんが油絵を始めたきっかけは、大学1年生の絵画の授業だ。それまで水彩しか描いたことがなかったが、夏休みの宿題で初めて油絵を描いたという。その絵が当時の絵画の先生の目に留まり、展覧会への出展を勧められた。2年生の春、工場を描いた風景画を出展したところ、第32回東光展に入選。「その後はわき目もふらず毎年のように展覧会出し続けました」と中西さんはなつかしそうに話す。

大学卒業後、中西さんが選んだ道は絵ではなく設計だった。「もともと絵は好きだったのですが、それだけでは食べていけないのではないかと考えて選んだの

が建築でした」。東急設計コンサルタントで設計に携わり、東急ハンズ渋谷店の設計ではスキップフロアを使った新業態に成功した。その後も東急ハンズ横浜店や目黒駅ビルなども手がけたという。

設計という多忙な仕事をこなしながらも、中西さんは絵を描き続けた。1990年には現代洋画精鋭選抜展で金賞受賞。翌年に個展「哀愁のパリ」で画壇にデビューした。

1995年、阪神大震災をきっかけに、「廃墟」をテーマに絵を描くようになる。建築に携わってきたからこそ感じる衝撃がそこにはあった。その後、アウシュビッツやチェルノブイリなどにも直接赴き、数々の作品を描いた。長崎の軍艦島を描いた「棄てられた島」で第33回日展の特選を受賞。53歳にして建築界から離れ、画家一本に専念することを決断した。

中西さんは、今回の赤レンガ倉庫の個展を区切りに、アトリエをパリに移す。かつてゴッホが住んだアトリエで創作活動をするという。「画家としてのスタートは遅れてしまいましたが、それを取り戻すためにもパリに行こうと思いましたが、もっと努力しなければ」と中西さんは力強い笑顔で話してくれた。パリでの刺激も加わり、今後も素晴らしい絵を発表しつづけてくれるだろう。



左：個展のパンフレット。ご息子がデザインを手伝ったという。
右：中西さんが表紙絵を手がけた横浜赤レンガ倉庫2号館発刊の広告リーフ「TRIVE」



横浜赤レンガ倉庫1号館で開かれた個展



鎌倉の中西さんのアトリエ

築理会サークル活動報告

ちくご会参戦記

渡辺 一男(部7期)

平成十六年四月三日(土 第二回(仮))ちくご会が開催されました。ちくご会って何?と思われる会員のほうが多いと思いますが「築理会ゴルフ親睦会」の略称のようです。



開催場所は栃木県鹿沼市の思い川東急ゴルフ倶楽部でした。当日は事前の雨天の予報にもかかわらず多少風が強かったもののやや汗ばむような晴天に恵まれ、総勢十五名のつわものが優勝賞金を目指して熱戦を繰り広げました。参加者は一期生三名、二期二名、三期二名、四期一名、五期一名、六期四名、そして我が七期二名という内訳でした。参加資格は卒業後三十年経過した者となっております。現在は八期生までに参加資格があるそうです。

今回はゴルフ場の場所柄行き方も様々で車組七名、電車組八名でしたが電車で行かれた方は行き帰りとも車内で宴会に参加できるという利点がありとても楽しそうです。次回は是非電車で行きたいと思えます。

さてコースの印象ですが栃木県の山間のゴルフ場らしくかなりアップダウンが多くてリフトやベルトコンベヤーが設置されており、それだけでも山岳コースの特徴を十分現しているコースでした。左右にOBが多くかなりプレッシャーのかかるホールも数多くありました。我々七期二名は初参加ですが、一~六期の諸先輩方々の足腰の丈夫さには本当に感心させられるばかりでした。グリーンはアンジュレーションがきつく、切れ方や速さの感覚を掴むのが大変でしたが、この難しいグリーンでしかも前半アウトのみでオリンピックのグランドスラムを達成した方がいらしたのにはたいへん驚かされました。プレー終了後のパーティーでは、優勝者やブービー



の方のご挨拶、全員の自己紹介を兼ねた近況報告などもあり、和気藹々の内に楽しく過ごさせて頂きました。

今回参加させていただき本当にありがとうございました。今後ともよろしくお願いたします。尚ベスグロと優勝はグロス八二で回られた六期の片淵様でした。次回の開催は十二月四日(土)の予定です。八期生の方の参加も大いに歓迎するそうですので奮って応募してください。

六期会ゴルフコンペ

松原 基雄(部6期)



六期生によるゴルフコンペが開かれた。今年五月十五日、仙台でのことである。当日、仙台泉パークタウンの中にある泉パークタウンゴルフクラブには、東北新幹線で前日から来仙、ゴルフ場に隣接したホテルなどに逗留している者、車で駆けつけた仙台在住の者が集まった。「仙台で集まってゴルフをやるよ」ということになって、総勢14名。(千葉さんは体調を崩しプレーは不参加)

前回は「千葉夷隅」で開催され、今回が三回目。卒業後33年経っても同期がこれだけ集まるのもまさに驚きであるが、この計画をまとめてくれたのが今回幹事の田所さん。東京組は往復の旅費など負担がかかるので、その分汗をかくことになったのが仙台在住の三人組。(喜多、千葉、松原)両者の事前の調整で準備は万端であった。

天候は晴れ、蔵王にはまだ残雪が残っているが吹く風も気持ち良く、大変穏やかなゴルフ日和となった。競技はダブルペリア方式で行ない、ショートホールではキャピン、ロングホールではドラコンを実施。50代後半に入った働き盛りの我々は、体力の衰えにも拘わらず頑張るものだからドラコンホールではOBの連発。楽しくラウンドを終えた結果、そのOBの連発をもともせず居並ぶ強豪を押さえて優勝したのは谷内さん、準優勝はベスグロの天野さんであった。プレー後のパーティーでは、ゴルフ談義と共に近況報告を含め四方山話に花が咲き、旧友との再会を喜び、笑顔で楽しむことで本当に素晴らしいものを得ることが出来た。その後、ゴルフ場を後にして仙台駅まで、ここで簡単に終わらないのが我ら六期生、せっかく仙台まで来たのだからと駅ビルのレストランで二次会を開き、一次会以上に盛り上がり、おじさんパワーが爆発した。最後に仙台駅のコンコースでは通行人の迷惑を省みず、全員の健康と次回開催を祈念して「手締め」にて今回の行事の幕を閉じ、それぞれ「牛タン」などお土産を手に帰路についた。

建築士“名門校”日建学院

V28達成! 学科・設計製図試験ともに **全国No.1**

おかげさまで建築士(平成15年度を含む過去累計実績)

230,000人を輩出!

建築と同様他の講座も抜群の合格実績を誇っています。本試験に向け日建学院が誇る、業界トップの伝統と実績で合格へ導きます。※講座によっては既に締切らせて頂いている講座もありますので予めご承知おき下さい。

教育訓練給付金制度対象講座多数あり、お問い合わせは下記フリーダイヤルまで。

リアルタイム
Web+通学講座開講!

忙しい人が無理なく取り組めるWEBを使用した自宅学習と通学の組み合わせで、資格の取得を提案&成功へのサポートをします。

建築資料研究社の主な出版物

建築設計資料/基本建築基準法関係法令集(建築士試験場持込み可)ほか多数

1級建築士学科

2級建築士学科

宅地建物取引主任者

FファイナンシャルPプランナー

2級福祉住環境
コーディネーター

測量士補bb(web講座のみ)

ブロードバンド専用
bb講座

技術士補 開講!

全国135校・660常備教室建築関連資格教育のパイオニア
日建学院 株式会社 建築資料研究社
〒171-0014 東京都豊島区池袋2-50-1
日建ワールドハウジングセンター
日建学院コールセンター
0120-243-229 (東京)

URL: <http://www.ksknet.co.jp/nikken/>

真鍋恒博先生主催の建築視察

真鍋恒博教授が継続的に主催している海外建築視察ツアー。本学科の学生が参加して毎回、充実した建築の旅をしています。今回の旅は東欧・ドイツ。ツアーに参加した学生に旅の報告をしてもらいました。

ドイツ視察旅行レポート

3年 神木 秀之

まず、この旅行は一瞬の油断もすきもない。真鍋先生が好奇心旺盛で2週間の旅行の計画をこれでもか、というくらい突き詰めて予定を立てられるので充実したものが出来上がる。やはり、そのような気持ちは私たちも同じで、自由行動のときはなるべく多くのものが見られるように計画をたてて限られた時間内に満足したいものだ。

その充実した中で、特に印象に残ったのはベルリンでの視察であった。予定上の視察ではドイツ連邦議会新議事堂、ギャラリー・ラファイエット、ユダヤ博物館などの日本の雑誌にも必ず載っているような有名な建物を見て本と実物の迫力の違いに感動した。また、自由視察のときもいろいろな建物を見ることができた。何が良いかというと、ベルリンの壁が崩壊した後にポツダム広場再開発地域となったこともあって、建物がまとまって存在している。そのため、歩きで見て回ってもすぐに次に見ようとしていた建物にたどり着いてしまう。さらに歩きでの視察の利点は、本には載っていないようなものまで発見できる。実際に私たちがポツダム広場に行く途中に日本大使館があったり、「広島通り」という日本のような通りがあったりと面白かった。それだけでなく、開発途中だったので近代的な建物が次々と建設されていてデザインも凝っているものが多かった。夜にそこに行くと、昼とはまた違った美しさを見せてくれた。

せっかくドイツに来たのだから、それだけでは終わらない。夕食と一緒に飲むワインやビールが最高においしかった。その土地ごとの特徴を持ったものを飲んで、いろいろな味を体験した。何よりも良かったことが昼間からビアホールに入り、定番のビールとグラシューという食べ物を頼むことだった。



ドイツ連邦議会新議事堂の上

『素材』へのこだわり

3年 郷 文美

2004年春、真鍋教授を隊長とする視察団がヨーロッパに向けて飛び立った。私は今回二度目の参加となる。この視察の良いところはなんとといっても事前学習と濃密なその内容にある。ただ建築マップに載っているような有名建築を見て歩くのではない。先生の厳選したテーマに基づき、隊員内で分担し調査する。それを他の隊員が読んでも分かるようにレポートにまとめ、ひとつの冊子にする。そうすることで、これから視察する内容を短時間で学習することができる。また自分で調べたところは特に愛着が湧くので視察中にも熱が入り、二週間という長い旅路にメリハリが着くというものである。

さて、今回は東欧・ドイツ建築視察であったが、そこで改めて気づかされたのは『素材』へのこだわりであった。ハンガリー、ブダペストにて国会議事堂に入ったときのことである。イムレ・シュテインドル設計のこの建物は1904年に完成したネオ・ゴシック様式の建物である。ここで何より驚いたのが、この建物の素材がほぼ100%ハンガリー産であるということ。唯一、階段ホールの黒い八本の柱だけがスウェーデン産のものである。議員ホールの壁を触ると分かるのだが、ここでは偽者の大理石が使用されている。本物であれば壁はひんやりとし、すぐには温まらない。大理石パウダーに馬の毛を混ぜ、大理石の模様に似せて造ったのである。この壁は、できる限りハンガリー産のものをという素材へのこだわりの表れである。国の政治を象徴する国会議事堂。その建築の素材に対する産地のこだわりが、ハンガリーの政治的独立を意思表示するものだったのかもしれない。

国の建物にはその時代の政治の流れと、その国独自のこだわりが反映されているように思える。『素材』に対するこだわりは各国にある。場合によってはこだわりというよりも適正と必然性といえるかもしれない。どちらにしる『素材』に対するこだわりは、外せない要素である。各国の建築を見ていくとその地域の『素材』へのこだわりが見えてくるような気がする。



ブダペストの国会議事堂の議員ホール



超高層の性能評価のことなら、我々にご相談下さい

◆超高層建築物の性能評価

◆時刻歴応答解析を用いた性能評価（免震含む）

＜TBTC構造性能委員会＞

委員長 寺本 隆幸（本学教授）
副委員長 和田 章（東京工業大学教授）
（本学非常勤講師）
委員 松崎 育弘（本学教授）
委員 北村 春幸（本学教授）他4名

指定性能評価機関（国土交通大臣第19号）

株式会社 東京建築検査機構

事務局 構造性能評価事業部 鈴木（松崎研OG）

TEL.03-5825-7545 FAX.03-5825-7540

E-mail:info@tokyo-btc.com

ホームページ http://www.tokyo-btc.com

新任教授紹介

佐々木文夫
工学部第一部建築学科 教授



本年4月1日付で工学部第一部建築学科に基幹基礎教育担当教員として着任いたしました。専門分野は応用数学で、中でもウェブレット解析という比較的新しい分野の研究を行っています。建築への応用としては、地震動データ、台風データ、画像データなどさまざまなデータの基本的性質を調べることに役立つのではないかと考えております。

講義は、「微分積分1,2」(1年前後期)、「数学演習1,2」(1年前後期)、「電算機2」(2年後期)、「建築数理1」(3年後期)、「構造特論」(大学院)と「基礎数学Aおよび演習」(機械学科1年通年)を担当いたします。

本学に着任するまでは、27年間鹿島建設に勤務しておりました。鹿島では情報処理部門の建築系に所属しており、入社以来、主として、建築の構造関係の解析システムの開発とそのシステムを用いた現象の解明、という業務に携わってきました。このような経験と自分の専門を生かし、今後は建築に現れるさまざまな数理現象の数学的な解明を研究室のテーマに掲げ教育・研究を行っていく所存でございます。

[略歴]

- 1975年 早稲田大学理工学部数学科卒業
- 1977年 早稲田大学理工学研究科数学専攻修士課程修了
- 1977年 鹿島建設入社(2004年3月退社)
- 1984年 MIT客員研究員(1985年まで)
- 1996年 東京大学大学院数理科学研究科
数理科学専攻博士課程修了
博士(数理科学)
- 1999年 日本応用数理学会論文賞受賞

「編集後記」

前号の会報を読んで築理会の危機を感じ、OBの方から広告掲載のお電話をいただいたときは本当にうれしく思いました。さらに初めて総会に参加していただいたり、また激励の原稿をいただいたりと、編集をしていて良かったと思います。そのようなわけで今回は「二匹目のドジョウ」ねらいの巻頭ページとなりましたが、会員あつての築理会です。会報にも投稿をよろしく申し上げます。(広谷 純弘hiro@archivision.co.jp)

築理会報2004夏号
2004年9月発行 Vol.35

発行所 : 東京都新宿区神楽坂1-3
東京理科大学工学部 第一部建築学科
築理会事務局 03-3260-4271(内3293)
03-3235-6897(FAX)

編集長 : 広谷 純弘
編集委員 : 石神一郎、森清、伊藤学、伊谷峰、安達功、渋川克也、
諸岡伸幸、中川信浩、平賀一浩、大野紋子、東有紀
印刷発送 : グローバルシステム株式会社

平成16年会費納入のお願い

現在、平成16年度の会費の納入をお願いしております。同封の振込用紙にて、お振り込み下さい。今後のさらなる築理会発展のため、多くの方のご協力をお願いします。

年会費 3,500円
加入者名 築理会
口座番号 郵便局 00110-5-171952

インフォメーション

築理会総会・懇親会の報告

去る5月22日に開催された築理会総会において、下記の議案が出席者の満場一致により承認可決されましたことをご報告いたします。

平成15年度決算・平成16年度予算

前号掲載のとおり

役員変更

4名の方が役員を退任され、新たに 林 孝夫氏(部4期)が常任幹事に就任し、また副会長の三松 一宇氏が企画総務委員長を兼務することになりました。

築理会ホームページがリニューアル!

<http://www.chikurikai.org>

掲示板やメルマガなど、積極的な参加をして、ご活用ください。また、ご自身のHP等へのリンク希望や情報提供、その他築理会活動全般へのご意見も募集しています。各委員会へのメールアドレスもございましたのでご利用下さい。築理会報のバックナンバーもアップされています。

築理会員データ確認カード		記入日: 20 / /	
ふりがな:	卒業年	年	3月
名前: (旧姓)	(期	研)	
	<input type="checkbox"/> I部	<input type="checkbox"/> II部	
ふりがな/勤務先:			
ふりがな/部署・役職:		TEL	FAX
電子mail:			
現住所: (〒)			
TEL		FAX	
電子mail:			
現住所以外の安定的な連絡先, 具体的な連絡方法及びTEL:			
所属学会	<input type="checkbox"/> 日本建築学会	<input type="checkbox"/> ()	
<input type="checkbox"/> ()	<input type="checkbox"/> ()	<input type="checkbox"/> ()	
通信欄			

住所等変更の場合は、上記データ確認カードにご記入の上、築理会事務局までご返送下さいませお願い致します。(お手数ですが拡大コピーの上ご利用ください。)

送付先: 築理会事務局 名簿作成委員会 (FAX: 03-3235-6897)